

-sis 名詞再論

——散文作家の場合——

柳 沼 重 剛

前号において筆者は、ギリシア悲劇詩人における -sis 名詞の用法、特にその periphrastic な用法——-sis 名詞の派生源である動詞を、使えば使えるのにそれを避けて、他の動詞と -sis 名詞の結合によって元の動詞とほぼ同じ意味を表わす——に注目した¹⁾。そこではあくまで悲劇詩人を中心に考察し、散文作家についてはごくあらましの所を言及するにとどめたので、ここで改めて、前号で悲劇詩人についてやったと同じことを散文作家についてまず行ない、然る後に話を先へ進めようというのが本稿の意図である。

-sis 名詞というのは動詞幹に接尾辞 -sis を付けて成立する名詞だから(つまり英語の *accept*>*acceptance* や *inform*>*information* に似ている)、例えばヘロドトスの第8巻54で、クセルクセスがアテーナイを占領したことを知らせるために伝令を派遣した(ἀγγελον ἀπέπεμψε)、そしてその伝令の派遣の翌日に(ἀπὸ δὲ τῆς πέμψιος τοῦ κήρυκος)、とあるのを見ると、これが -sis 名詞の最も本来的な、と言うか、基本的な、と言うか、とにかくそういう使い方だろうと想像されるのに対して、実はこのような -sis 名詞の使い方は散文になってから初めて盛に行われるようになったのだ、ということは前号で指摘しておいた。そしてむしろ、詩人にとっては -sis 名詞の利用箇所数はさして多いとは言えないが、その用い方は結構多様で、特に注目すべきは、-sis 名詞を主語とし、copula ないしはそれに準ずる動詞を述語動詞として配する用法(前号の分類によればA 1)だと考えた。

以下に参照する作品を次のように限定する。(カッコ内はあとで掲げる「表」等の中で用いる略号である)——ヘロドトス第1巻(Hdt I)、トゥーキューディデース第1巻(Thuc I)、クセノポーン『アナバシス』第1—2巻(Xen, *Anab* I, II)。以上を歴史家とすれば以下は全部弁論家で、アンティポーン(Ant)の『四部作』第1—第3(*Tetr* I—III)、『ヘローデーデース殺害事件』(*Her*)、『合唱隊員殺害事件』(*Chor*)、リュシアース(Lys)の演説第1, 2, 12, 13, 16,

19, 33 番、アンドキデース (And) の『祖国復帰』(Red)、『不敬罪について』(Mys)、『対スパルタ講和を論ず』(Pac)、イソクラテース (Is) の『パネーギュリコス』(Pan)、エウアゴラース』(Euag)、アイスキネース (Aesn) の『クテーシポーン弾劾』(Ct)、デーモステネース (Dem) の『王冠について』(Cor)。

使用テキストは、前回はすべて Oxford Classical Texts (OCT) に依ったが、今回の作家・作品の中には OCT に含まれていないものがあるので、その場合は Loeb Classical Library (Loeb) に依った。すなわち、上記中 Hdt, Thuc, Xen, Lys, Dem は OCT に依り、Ant, And, Is, Aesn は Loeb に依る。また前回用いた A 1, A 2 等々の符号はここでも踏襲することにする。念のために説明しておく、

- A 1: -sis が copula ないしはそれに類する動詞 (εἶμί, γίγνομαι, ἔρχομαι など) の主語になっている場合。
- A 2: -sis が上記以外の一般の動詞の主語になっている場合。
- A 3: -sis が文法上の要求から斜格にはなっているが、意味から言えば主語だという場合 (例えば不定法の意味上の主語としての対格)。
- B 1: -sis が 'Auxiliary Verb' (例えば ποίεω τίθημι) の目的語になっている場合。
- B 2: -sis が一般動詞の目的語になっている場合。
- B 3: -sis が前置詞を伴って自動詞に連なっている場合 (例えば εἰς ~-σιν ἔρχομαι)。
- B 4: -sis が属格支配・与格支配の動詞 (場合によっては形容詞) の目的語となっているが、意味の上では B 2 に準ずる場合。
- C: -sis が(殆どの場合前置詞を伴って)副詞節相当句になっている場合。
- D: -sis 自身が属格となって他の名詞にかかり、主語的、あるいは目的語的役割を果たしている場合。

1

ヘーロドトスから始めよう。さっき断わったように、ここで見るのは第1巻だけである。

1. αἴρσεις (11.2): νῦν τοι δυῶν ὁδῶν παρουσιάζων, Γύγην, δίδωμι αἴρσειν.
 「二つある道のどちらかを選ばせてあげよう」と言っているのだから B 2。こ

の *δίδομι* を助動詞と見なすかどうかは微妙な所。私は、これは「～させる」ではなくやはり「許す」「認める」と解して B 2 とした。

これに対するギュゲースの答 (11.3) は *ἰκέτευσέ μιν ἀναγκαίῃ ἐνθέειν διακρίναι τοιαύτην ἀφροσύνην* というのだが、今度は、「そのような選択を(決めることを)無理強いしないで下さいと嘆願した」ので、periphrastic と考えるに及ばず。不採用。

2. *ἀνάγνωσις* (116.1): *τὸν Ἀστυνάγρεα ἐσήει ἀνάγνωσις αὐτοῦ*。「その子の *ἀνάγνωσις* がアステユアゲースの(頭の)中に入って行った」とは「その子が誰であるか知っているように思えて来た」ということだから A 2。

3. *ἀπόδειξις* (Prooem.): *Ἡροδότου Ἀλικαρνησέως ἱστορίης ἀπόδειξις ἦδε*。余りにも有名なヘーロドトス第1巻冒頭の文。「これはハリカルナッソスのヘーロドトスの *ἱστορίη* の *ἀπόδειξις* である」とは「ヘーロドトスが *ἱστορεύω* したことを *ἀποδείκνυμι* するものである」ということで A 1。ここに書かれた以外のどんな言い方をするよりも直截簡明。

4. — (207.7): *ἡμῖν τὸ ἐνθεύτεον λείπεται ἀπόδειξις ἔργων μεγάλων*。「大事業」を主語にして書くこともできる。A 2。

5. *ἄποψις* (204.1): *πεδίον ἐκδέκεται πλήθος ἄπειρον ἐς ἄποψιν*。C。

6. *διάβασις* (186.3): *ἐπ' ὧν τὴν διάβασις ἐποιεῖντο*。*διάβασις* を *ποιεῖν* するようにした、などと言わずにあっさり *διαβαίνω* を使ってもよくはないかと思うから B 1 と認めたが、前後の動詞の時制がすべてアオリストになっている中にこの *ἐποιεῖντο* だけが未完了だというのと相俟って、些か微妙。

7. — (205.2): *ἐπὶ τοῦ ποταμοῦ διάβασις*。C。「渡河のため」と訳せば periphrasis でも何でもなくなる、と言われそうだが、それは、日本語でもわざわざ「河を渡るために」と動詞的に言う他に、「渡河のために」という副詞句として言うこともできる、ということ、つまり、訳の問題にすぎなくて、ギリシア語でこれを動詞を用いて書くこともできるという事情には関わらない。

8. *ἐξέυρεσις* (94.3): *τὴν ἐξέυρεσιν οὐκ οἴκηθησάντων Λυδοί*。かなり躊躇したはてに B 2 とした。*ἐξέυρεσις* は「発明、発見」であるよりは「この発明、その発見」と具体的で(ここでは実は一種の囲碁のことを指している)、「その発明を自分たちのものだとは言っていない」ということ。だからこれは periphrasis ではないと言うべきかも知れない。しかし「これを自分たちが発明したとは言っていない」というもっと平明(で自然)な言い方ができる所なので、やはり B 2 とした。

9. ἐπιχειρήσεις (11.5): ὑπνωμένῳ δὲ ἡ ἐπιχειρήσεις ἔσται. これはカンダウレースの妃がギュゲースに夫を殺せと命令する言葉の末尾。A 1 の効果絶大。「(王が)眠っている間に攻撃はあるべし」とは要するに ἐπιχειρήσειよ、「やっつけろ」ということ。ただしそうやってしまうと、-sis 名詞を用い、定冠詞をつけた効果は失われる。つまり、文章というものは徒らに書き攻めようと思つてはならぬ、という戒めとなる。書き変えれば元の文の何かが失われるものなのである。

10. ἐποψίς (64.2): ἐπ' ὅσον ἐποψίς τοῦ ἱεροῦ εἶχε. 「神殿からの見渡しがあつた限りで」とは「神殿から見渡す(ἐφοράω) ことができる限り」で A 1。

11. ζήτησις (94.6): κατὰ βίον καὶ γῆς ζήτησιν は 対格+ζητοῦντες と分詞を使つてもよく、C。

12. ὄρχησις (202.2): ἐς ὃ ἐς ὄρχησίν τε ἀνίστασθαι καὶ ἐς ἀοιδὴν ἀπικνέσθαι. B 3。これは、前半の ὄρχησις を含む部分は、ὄρχησις を ὄρχεσθαι と不定法にして ἀνίστασθαι を ἀνισταμένοι と分詞にする(あるいは ἀνίστασθαι はそのままにして ὄρχησις の方を分詞にする)などという書き方でもよいが、これは τε...καὶ という慣用句を含んでいるから前後の形は整えなければならず、そうなると ὄρχησιν に対応する ἀοιδή の方も ἀοιδεῖν とか何とかしなければならず、それなら恐らく ἀπικνέσθαι も何とかしなければならなくなって、要するに書き変えない方がよい。

13. πρόχρησις (160.5): οὔτε οὐλας κρηθέων πρόχρησιν ἐποίηστο θεῶν οὔδενι. οὔτε... πρόχρησις が宗教用語であることは確かで、要するに「πρόχρησις の儀を執り行わなかった」と言っているのかも知れないが、この語の派生源の προχρῶ という動詞がすでに宗教用語なので、やはり periphrasis と見てよいと思う。B 1。

以上で Hdt I 中の periphrastic -sis はすべてである。計 13 例。A 1=3, A 2=2, B 1=2, B 2=2, B 3=1, C=3。

ここに採り上げなかった -sis 名詞は 30 語 42 箇所。そのいちいちをここに紹介することはやめるが、ὄψις が 14 箇所にも出て来ることが目を惹く。これはすでに出来上つた観念語になっているためだが、こういう例は悲劇にはなかった。これに対して、やがて夥しく使われることになる φύσις や πάσις がここではまだ 1~2 箇所にしか現れていない、というのも目を惹く。なお OCT では Hdt I の頁数は 108 だから、-sis 名詞は 2 頁に 1 語の割で使っている

ことになるが、その periphrastic な用法となると 8.3 頁に 1 語の割にしかなくていない。

次にトゥーキューディデース第 1 巻。章節番号の右肩の * 印は、その箇所が演説であることを示している。

1. αἰτήσεις (32.3*): μετὰ τῆς ξυμμαχίας τῆς αἰτήσεως. C.
 2. ἀναχώρησις (93.8): μετὰ τὴν Μήδων ἀναχώρησιν. C.
 3. — (128.5): μετὰ τὴν ἐκ Κύπρου ἀναχώρησιν. C.
 4. — (137.4): γράφας τὴν τε ἐκ Σαλαμίνος προάγγελσιν τῆς ἀναχωρήσεως.
- D. ただし -sis 名詞を使ったために誰がどこから「撤退」するのかこの文からだけでは分からないことになって、そのために Gomme はこの句について 1 頁にわたる註をつけなければならなかった²⁾。
5. ἀξίωσις (41.1*): (ἐχομεν) παραίνεσιν δὲ καὶ ἀξίωσιν. B 1. この ἐχομεν は前の文に属していて δικαιώματα を目的語にしているが、παραίνεσιν と ἀξίωσιν にもかかっているととらないわけには行かない。とすれば παραίνεω, ἀξιώω という動詞も使える所なので B 1 でよい。
 6. — (69.1*): τὴν ἀξίωσιν τῆς ἀρετῆς ὡς ἐλευθερῶν τὴν Ἑλλάδα φέρεται.
- B 1. これに対して 37.1* の ἀξίωσις は periphrastic にはなっていない。
7. ἀπόδειξις (97.2): τῆς ἀρχῆς ἀπόδειξις ἔχει τῆς τῶν Ἀθηναίων. B 1.
 8. ἀπόκνησις (99.3): διὰ γὰρ τὴν ἀπόκνησιν τῶν στρατῶν. C.
 9. ἀποτείχισις (65.3): μετὰ δὲ τῆς Ποτειδαίας ἀποτείχισιν. C.
 10. αὔξησις (69.4*): οὐκ ἀρχομένην τὴν αὔξησιν τῶν ἐχθρῶν . . . καταλύου-
τες. 一応 B 2. ただし、この句の前後のつながり工合から見て、αὔξω (あるいは αὔξανω) という動詞を用いて簡潔な文章を書くことは殆ど不可能と見られるので、periphrasis と解さない方がよいかも知れない。
 11. δήλωσις (73.3*): οὐ παραιτήσεως μᾶλλον ἔνεκα ἢ μαρτυρίου καὶ δηλώ-
σεως. C.
 12. διάγνωσις (50.2): οὐ βεβαίως τὴν διάγνωσιν ἐπιούοντο. B 1.
 13. διάλυσις (51.2): οἱ Κορίνθιοι αποτραπόμενοι τὴν διάλυσιν ἐποίησαντο.
- B 1.
14. — (137.4): γράφας . . . τὴν . . . προάγγελσιν τὴν τῶν γεφυρῶν, ἣν φευδῶς προσεποιήσαντο, τότε δὲ αὐτὸν οὐ διάλυσιν. 先の No. 4 と同一文の一

部。これもこの文の構成から考えてこれ以外の書き方をするのは無理だが、B 2。

15. *δόσις* (137.3): *ὁ Θεμιστοκλῆς ἐκεῖνόν τε ἐθεράπευσε χορημάτων δόσει*. C.
16. — (143.2*): *οὐδείς ἂν δέξαιτο . . . ἐλπίδος ὀλίγων ἡμερῶν ἔνεκα μεγάλου μισθοῦ δόσεως ἐκείνους ξυναγωνίζεσθαι*. D.
17. *ἐλευθέρωσις* (132.4): *ἐλευθέρωσίν τε γὰρ ὑπισχεῖτο αὐτοῖς*. B 2.
18. *ἐνθύμησις* (132.5): *δείσας κατὰ ἐνθύμησίν τινα ὅτι . . .* C. この *ἐνθύμησις* は分詞などで置換え可能だが、そうすると *δείσας* という分詞を何とかしなければならなくなり、そうすると . . . と、この 13 行に及ぶ緊密に構成された文をいじりまわさなければならなくなる。
19. *ἐξήγησις* (72.1): *ἐβούλοντο . . . ὑπόμνησιν ποιήσασθαι τοῖς πρῶτον, καὶ τοῖς νεωτέροις ἐξήγησιν*. B 1.
20. *ἐπικράτησις* (41.2*): *τὸ δὲ ἡμᾶς Πελοποννησίους αὐτοῖς μὴ βοηθῆσαι παρέσχεν ὑμῶν Λίγυνητῶν μὲν ἐπικράτησιν, Σαμίων δὲ κόλασιν*. B 1. 定冠詞つきの不定法句を主語に据え、目的語に *-sis* 名詞を配した固い表現。勿論もっと柔かくも書けるが、トゥーキューティデースは敢えて固い方を選んだ。
21. *ἐπιχείρησις* (33.3*): *προκαταλαμβάνοντας ὑμᾶς νῦν ἐς τὴν ἡμετέρα ἐπιχείρησιν*. C.
22. — (70.7*): *διὰ τὸ ταχεῖαν τὴν ἐπιχείρησιν ποιῆσθαι*. B 1.
23. *ζήλωσις* (132.2): *τῇ τε παρανομίᾳ καὶ ζήλωσει τῶν βαρβάρων*. C.
24. *ζήτησις* (20.3): *ἀταλαίπωρος τοῖς πολλοῖς ἢ ζήτησις τῆς ἀληθείας*. A 1. *οἱ πολλοί* を主語とする方が普通だろう。
25. *κατάλυσις* (18.1): *μετὰ δὲ τὴν τῶν τυραννῶν κατάλυσιν ἐκ τῆς Ἑλλάδος*. C.
26. — (107.6): *τοῦ δῆμον καταλύσεως ὑπόφια*. D.
27. *κόλασις* (41.2*): No. 14 の引用文参照。B 2。
28. *κρίσις* (23.1): *τοῦτο . . . ταχεῖαν τὴν κρίσιν ἔσχεν*. B 1. この *κρίσις* を *κρίνω* の如何なる形を用いても置換えることはむずかしい。
29. *κτῆσις* (8.3): *τὴν κτῆσιν τῶν χορημάτων ποιούμενοι*. B 1. *ποιούμενοι* に代えて *κτῆσις* そのものを分詞にすることも容易にできる。
30. — (13.1): *τῆς Ἑλλάδος . . . τῶν χορημάτων τὴν κτῆσιν ἔτε μᾶλλον ἢ πρότερον ποιουμένης*. 上の No. 29 と同巧異曲。B 1。
31. *κτίσις* (18.1): *μετὰ τὴν κτίσιν τῶν νῦν ἐνοικούντων αὐτῆν Δωρίων*. C.

32. μάθησις (68.2*): ἐκάστοτε τὴν μάθησιν ἐποιεῖσθε. B 1. ここまででも十分分るように、Thuc の B 1 は大部分 -σιν ποιέω である。

33. μέλλησις (125.2): ἐκπορίζεσθαι δὲ ἐδόκει ἐκάστοις . . . μὴ εἶναι μέλλησιν. A 3.

34. ξύγχυσις (146): σπονδῶν γὰρ ξύγχυσις τὰ γιγνόμενα ἦν καὶ πρόφασις τοῦ πολεμεῖν. A 1. これは Thuc I の末尾を締めくくる文。「一つ一つの出来事が重なって、条約を破棄することにも戦端を開く口実ともなった。」ξύγχυσις と対をなしている πρόφασις が「口実」という具体的なものを表すから、この ξύγχυσις もわざわざ動詞的に捉えるには及ばないようにも思える。しかし一方その πρόφασις が τοῦ πολέμου ではなく τοῦ πολεμεῖν という不定詞によって限定されていることに勇気づけられて、A 1。

35. ξύλλησις (134.1): ἐν τῇ πόλει τὴν ξύλλησιν ἐποιούοντο. B 1.

36. ξύμβασις (61.3): ξύμβασιν ποιησάμενοι καὶ ξυμμαχίαν ἀναγκαίαν. B 1. これなどもこれ以外の形では書きにくいだろう。

37. παραίνεσις (41.1*): No. 5 を参照。B 1。

38. — (92): οὐδὲ γὰρ ἐπὶ κωλύμῃ, ἀλλὰ γνώμῃ παραίνεσει. C.

39. παραίρεσις (122.1*): ξυμμαχῶν ἀπόστασις, μάλιστα παραίρεσις οὕσα τῶν προσόδων. 「同盟国の ἀπόστασις (これは既成概念) は特に πρόσοδοι を παραίρῶ するものだ」というわけで、A 1。

40. παραίτησις (73.3*): No. 11 を参照。C。

41. προενοίκησις (25.4): κατὰ τὴν Φαιάκων προενοίκησιν τῆς Κερκύρας. C. これも Thuc の造語。のみならず、この語の派生源たる動詞 προενοικέω の初出はずっと後、前1世紀のディオドロスである。

42. ὑπόμνησις (72.1): No. 19 の引用文を参照。B 1。

以上集計すると、Thuc I の periphrastic -sis は 33 語 42 箇所、内訳は A 1=3, A 3=1, B 1=16, B 2=4, C=15, D=3 となり、B 1 と C とが際立って多い。なお OCT の Thuc I の頁数は 88 だが、Hdt の 1 頁は平均 27 行なのに対して Thuc は平均 31 行ある (これは apparatus criticus の量による) から、Thuc を Hdt なみに組版すれば $88 \times \frac{31}{27} = 101$ 頁になるはずで、そうすると Thuc I の periphrastic -sis は 2.4 頁に 1 語の割で使われていることになり、Hdt I の 8.3 頁に 1 語というのに比べればかなり多い。こ

こに取上げなかった -sis 名詞は延べ 60、従って Thuc I では -sis 名詞の約 41% が periphrastic だということになって、これも Hdt I の 24% の倍に近い。また Thuc I には、Hdt I の *ᾄσις* のように、特に多用されている語というのではない。*ἀναχώρησις*, *ἀνάστασις*, *πρόφασις* というような、如何にも Thuc に出て来そうな語がおのおの 5 回出ている、というのが最高である。その代りに多いのが新語で、その全部が Thuc の造語とは断定できないが、とにかく Thuc 初出の -sis というのが第 1 巻だけで 28 語もある、ということは Thuc I の -sis の大体 4 割が Thuc 初出の語だということになる。上に挙げた periphrastic -sis の中では、*ἀπόκνησις*, *ἀποτείχεσις*, *δήλωσις*, *ἐξήγησις*, *ἐπικράτησις*, *ζήλωσις*, *κατάλυσις*, *κτίσις*, *μέλλησις*, *ὄλοφύρησις*, *παραίρεσις*, *παράτησις*, *προενοίκησις*, *ὑπόμνησις* がそうである。

-sis 名詞の使い方に関する限り、Thuc の叙述部分と演説部分には顕著な相違はない。

最後にクセノポーンに眼を移すと、ここには驚くほどと言うかがっかりするというか、とにかく periphrastic -sis は殆どない。

1. *ἐπίστασις* (*Anab* II 4.26): ὅσον δὲ χρόνον τὸ ἡγούμενον τοῦ στρατεύματος ἐπιστήσεις, τοσοῦτον ἢ ἀνάγκη χρόνον δὲ ὅλον τοῦ στρατεύματος γίγνεσθαι τὴν ἐπίστασιν. A 3. ὅσον... τοσοῦτον の前半に動詞を、後半にその動詞の -sis 名詞を配した。

2. *πρόφασις* (*Anab* I 2.1): τὴν μὲν πρόφασιν ἐποιεῖτο. B 1. これは辛うじてという感じで、こんなのは periphrasis ではないと言われれば、そうかも知れないと認めてもよい。

No. 1 によって、クセノポーンといえども決して無造作に書いているわけではない、ということが知られるのだが、*Anab* I, II を通じて periphrastic -sis というのはこれしかない。ただ -sis 名詞というだけなら延べ 35。*Anab* I, II の OCT-Hdt に換算しての頁数は 65 だから、-sis 名詞は 1.8 頁に 1 語だが、periphrastic -sis となると上記のような有様である。

以上 3 者を歴史家としてまとめてみることに意味があるかどうか分らないが、とにかくまとめてみると、総頁数 278、A 1=6, A 2=2, A 3=2, A 3=2,

B 1=19, B 2=6, B 3=1, C=18, D=3 となる。

2

次に弁論家をひとわたり見てしまおう。まずアンティポーン。

1. αἰτησις (Her 4): εἰκὸς γὰρ ἐν ἀνδράσι γε ἀγαθοῖς καὶ ἄνευ τῆς αἰτήσεως τὴν ἀκρόασιν ὑπάρχειν τοῖς φεύγουσιν, ὅπερ καὶ οἱ διώκοντες ἔτυχον ἄνευ αἰτήσεως. 無論両方 C。この αἰτησις を分詞などで置換えることはできるが、この前後関係では文を悪くするだけだろう。

3. ἀναίρεσις (Tetr II 3.6): περὶ τὸν τῆς ἀναίρεσεως καιρὸν πλημμελήσας. 「(投槍を)取上げる時を誤って」D。

4. ἀπόδειξις と ἀπόκρισις (Her 65): ἐμοὶ μὲν γὰρ τῷ μὴ ἐργασμένῳ τοσοῦτον τὸ μακρότατον τῆς ἀποκρίσεώς ἐστιν, ὅτι οὐκ ἐργασμαι τῷ δὲ ποιήσαντι ῥαδίᾳ ἐστὶν ἢ ἀπόδειξις. ἀπόκρισις の方は「私に答えられる精一杯のこと」で、まあ D か。ἀπόδειξις の方は容易に不定法を含む文に直すことができ(そして弁論家ではむしろその方が普通)、ということは逆に、それに比べれば ἀπόδειξις の方は概念化が進んでいる、ということになるかも知れない、などと考えると、躊躇しつつも A 1。

6. διάρωσις (Chor 18): τὴν διάρωσιν ποιῆσθαι. B 1。

7. δόσις (Ven 18): πειράσομαι . . . ὁμῖν διηγήσασθαι, ὡς γεγένηται ἡ δόσις τοῦ φαρμάκου. これは典型的な A 1 の例。

8. ἐκπληξις (Her 6): ταῦτ' οὐκ ἐκπληξιν πολλὴν παρέχειν ἀνάγκη ἐστὶ . . . 怪しいけれど ἐκπλήσω を使っていないので B 1。

9. ἐπιθέσις (Tetr I 2.13): μὴ συνπεριβάντες τῇ τούτων ἐπιθέσει . . . B 4

10. — (Tetr I 3.7): ἐκανθὴ ἦν ἡ ὑποψία ἀποτρέφαι τῆς ἐπιθέσεως. B 4.

11. καταφήρισις (Ven 3): ἐκείνοις περὶ τῆς καταφερίσεως δικάζετε. これも怪しいながら C。

12. κρίσις (Tetr II 2.2): δόξη καὶ μὴ ἀληθεία τὴν κρίσιν ποιήσασθαι. B 1。

13. μετέκβασις (Her 22): ἡ μετέκβασις ἐγένετο εἰς τὸ ἔτερον πλοῖον. A 1。たかが別の船に乗り移ったほどのことをひどく大仰な言い方をするとと思われるかも知れないが、前後の脈絡と演説の調子を考えれば、これでも自然な文章で

ある。

14. *πόσις* (Chor 22): *ὁ δὲ τοὺς τε λόγους τοὺς λεχθέντας περὶ τῆς πόσεως τοῦ φαρμάκου . . . ἐπισταίντο*. C.

15. *πρᾶξις* (Tetr II 4.9): *οὐχ ἡμεῖς . . . αἰτιοί ἐσμεν, ἀλλ' ἡ πρᾶξις τῶν ἔργων*. A 1. *πρᾶξις* がこのように periphrastic に使われるのは珍しい。

以上ですべて A 1=4, B 1=4, B 4=2, C=3, D=2. 取上げなかった -sis は 31. 従って -sis 名詞中 periphrastic なのは約 33% である。なお、Loeb 版の Ant を OCT の Hdt なみの組版にすると、頁数は Loeb の時の約 79% になる計算である³⁾。Loeb での Ant の頁数は 109 だから、OCT-Hdt だと 86 頁になる。そこで、Ant では periphrastic -sis は 5.7 頁に 1 語の割で現れることになる。

次はリュシアース。

1. *ἀναίρεσις* (II 7): *ἔδοντο αὐτῶν δοῦναι τῶν νεκρῶν ἀναίρεσιν*. B 1. *ἀναίρεσις* が「遺体收容」という概念として用いられる(たとえ *νεκρῶν* を伴わなくても)ことがあることは確かだが、*ἀναιρέω* という動詞の中動相がすでに、Hdt や Thuc において「遺体を收容する」「遺体を引取る」という意味で使われているので、B 1。

2. *ἀπόδειξις* (XII 19): *τοῦ τρόπου τοῦ αὐτῶν ἀπόδειξιν ἐποίησαντο*. B 1.

3. *ζήτησις* (XII 30): *εἰς τὰς οἰκίας ἦλθον . . . ζήτησιν ποιούμενοι*. B 1.

4. *κατάλυσις* (XIII 20): *τὰ φηρέσματα . . . ἐπὶ κατάλυσει τοῦ δήμου ἐγένοντο*. B 3.

5. *κρίσις* (XIII 35): *εὐθέως κρίσιν τοῖς ἀνδράσι τοῦτοις ἐποίουν*. B 1.

6. *μήνυσις* (XIII 32): *τινὲς ἐπεμελοῦντο ὅπως καὶ ἐν τῷ δήμῳ περὶ τῶν στρατηγῶν καὶ τῶν ταξιάρχων μήνυσις γένοιτο*. A 1. *μήνυσις* を *μηνύω* という動詞に置換えて書けないことはないが、何か異様な文章になりそうである。

7. *πρόσταξις* (II 1): *ἡ πόλις μοι δοκεῖ . . . ἐξ ὀλίγων πῆν πρόσταξιν ποιῆσθαι*. B 1.

リュシアースの七つの演説に見出される periphrastic -sis はこれで全部である。A 1=1, B 1=5, B 3=1. 取上げなかった -sis は 34. 従って -sis 名

詞全体に対して periphrastic -sis の占める比率は約 17%。またこの七つの演説の頁数は(例の如く OCT-Hdt に換算して) 82。それゆえ、ただ -sis 名詞というだけなら 2 頁に 1 語使用されているが、periphrastic -sis となると 11.7 頁に 1 語である。

次はアンドキデース。

1. *κατάλυσις* (*Mys* 36): ἐπὶ τῇ τοῦ δήμου καταλύσει. C.
2. — (*Pac* 6): ὁ δῆμος καθελύθη; τί δέ; πραττόντας τινες δήμου κατάλυσιν ἐλήφθησαν; たたみかけるような問いかけ。同じことをいろいろな言い方を変えて相手に詰め寄っている文章の一部。B 2.
3. — (*Pac* 12): διορίζομαι . . . τὸν δὲ πόλεμον δήμου κατάλυσιν γίγνεσθαι. A 3.
4. *μετάστασις* (*Red* 8): ἐγὼ . . . εἰλόμην ταῦτα, ἃ ἐμοὶ μὲν λύπας ἐπὶ χρόνον πλεῖστον οἴσειν ἐμελλεν, ὑμῖν δὲ ταχίστην τοῦ παρόντος τότε κακοῦ μετάστασιν. εἰλόμην が二つの目的語句を持ち、それが ἐμοὶ μὲν . . . と ὑμῖν δὲ と対照し、前者はそれを ταῦτα ἃ と受けて名詞節となし、後者は -sis 名詞を用いて名詞句となした。それでいて前後のバランスは崩れない。

と褒めはしたものの、periphrastic -sis はこれで全部である。甚だ少ない。ただし、*ἀκρόασις*, *ἀπόδειξις*, *ἐνδειξις*, *μήνυσις* などの語はたびたび現れ、その都度 *ἐγένετο* だの *ποιεῖσθαι* だのいう動詞を伴っていて、その限りでは全部 A 1, B 1 である。Liddell-Scott-Jones の辞典ではこれらの語は ‘Attic law term’ ということになっているが、そして無論その通りなのだが、私見によれば、これらの語というよりはむしろ、上記の動詞を伴った句が、法律用語と見なさるべきである。なぜならこれらの語は、少くとも弁論家においては、これらの動詞を伴うことなしに現れることがないからである。それゆえこれらの語は採らなかつた。因みに *ἀκρόασις* は *Mys* 9, *ἀπόδειξις* は *Red* 3 でそれぞれ 1 度使われているだけだが、*ἐνδειξις* は *Mys* で 5 回、*μήνυσις* はやはり *Mys* で 15 回使われている。

アンドキデースの -sis 名詞は 15 語 36 箇所、内 periphrasis は 4 である。法文の引用等を除いた演説本文を例によって OCT-Hdt に換算すると 66 頁となる。従って、And は -sis 名詞は 1.8 頁に 1 語の割で使用しているが、その

periphrasis となると 16.5 頁に 1 語しか現れないことになる。-sis 名詞全体の中で periphrastic -sis が占める比率も 11% でしかない。(参考までに、悲劇作家の場合この比率は 20~22% だった)

次はイソクラテース。

1. ἄφριξις (*Euag* 53): συνέβη γὰρ αὐτῷ διὰ τὴν ἀφριξίν τὴν εἰς Κύπρον καὶ ποιῆσαι καὶ παθεῖν πλείστ' ἀγαθὰ. 要するに C。

2. ἐπίδειξις (*Pan* 17): τὸν μὴ μόνον ἐπίδειξιν ποιούμενον ἀλλὰ καὶ. . .

B 1. これも果して periphrasis と認めるべきかどうか問題はある。

3. ἐπίδοσις (*Pan* 10): ἡροῦμαι δ' οὕτως ἂν μεγίστην ἐπίδοσιν λαμβάνειν.

B 2.

これしかない。*Euag* という賞讃文はともかく、*Pan* の長さを考えればこれは無いに等しい。それでいてこの二つの作品で使われた -sis 名詞の数は延べで 83 に及んでいるのだから、イソクラテースにとって -sis 名詞とは概念語以外のものではなかったことになる。それを裏書きして、*πρᾶξις* は 18 回、*φύσις* は 25 回使われている。つまりこの 2 語で -sis 名詞総数の半ば以上になっているのである。一応数字を挙げれば、Is の OCT-Hdt の頁数は 85。それゆえ -sis 名詞は毎頁 1 語の割で使われているが、periphrasis は 28 頁に 1 語しか現れない。-sis に対する periphrasis の比率も 4% 弱でしかない。もっとも、今見たのは Is の全著作の 1 割強にしか当たってなくて、残りの全部に目を通すと様子は違って来るかも知れない。しかしそれほど大きく違っては来ないだろう。

ついでだから全部見てしまおう。今度はアイスキネース。

1. ἀνάστασις (*Ct* 126): ἐπ' ἀναστάσει τῆς ἐκκλησίας οὐσης. B 3.

2. ἀναχώρησις (*Ct* 87): ὅθεν μὴ νικήσασι μάχην οὐκ ἦν ἀναχώρησις. A 1. とは言え、これも periphrastic かと言われそうな句。

3. παράκλησις (*Ct* 71): διὰ τὴν τῶν Ἑλλήνων παρακλήσιν. C.

以上。*Ct* で使われている -sis の延べ数 111、内 periphrasis は怪しいのま

で含めて僅かの 3。OCT-Hdt に換算しての Ct の頁数は 80。そこで -sis 名詞ならば毎頁 1.4 語の割だが、periphrasis となると 27 頁に 1 語しかないことになる。

最後はデーモステネース。

1. διάγνωσις (Cor 7): οὕτω διαγνώσιν ποιήσεται περὶ ἀπάντων. B 1.
2. ἐξέτασις と ἀποδείξις (Cor 310): τούτων γὰρ ἀπάντων ἦν ἐν τοῖς ἄνω χρόνοις ἐξέτασις, καὶ ἔδωκεν ὁ παρελθὼν χρόνος πολλὰς ἀποδείξεις. A 1, B 1.
4. ἐξέτασις (Cor 320): τῶν κολακεύειν ἕτερον βουλομένων ἐξέτασις ἦν. A 1.
5. — (Cor 226): νομίζων . . . οὐχὶ τῶν πεπολιτευμένων ἐξέτασιν ποιήσεν ὑμᾶς. B 1.
6. — (Cor 246): ὧν γ' ἂν ὁ ῥήτωρ ὑπεόθυνος εἴη, πᾶσαν ἐξέτασιν λαμβάνετε. B 1. これら、つまり Nos. 4, 5, 6 は、もし動詞がこのようにいちいち違っていなければ採らなかつたろう。しかし「査察があった」「査察を行なった」「査察を受けた」と見ることもできる。これは、今回目を通す余裕がなかった文献に当ることによって、確証あるいは修正する必要がある。
7. κρίσις (Cor 226): νομίζων . . . λόγον κρίσιν ἔσσεσθαι. A 3.
8. κτῆσις (Cor 308): ἄνησιν μὲν οὐδέμιαν φέροντας οὐδ' ἀγαθοῦ κτῆσιν οὐδένης. B 2.
9. ἄνησις: 上記 No. 8 を見よ。B 2.
10. προαίρεσις (Cor 292): τῇ προαίρεσει τῶν κοινῶν. C.
11. τάξις (Cor 13): ἐν ἐπιηρείας τάξει καὶ φθόνου. この ἐν τάξει+gen. というのは「～を意図して」「～のつもりで」「～として」(英語でなら 'by way of ~, as ~) という熟語ととりたくなるが、熟語にしては用例がそれほど多くない。C。

デーモステネースもこれだけである。Dem は OCT ではあっても、Hdt が 1 頁平均 27 行なのに対して Dem は 28 行あるからこれも換算せねばならず、換算すれば Cor は 86 頁となる。そして Cor に使われた -sis 名詞は延べ 89、内 periphrastic -sis は 11。それゆえ、-sis 名詞は 1 頁に 1 語の割、periphrastic の方は 7.8 頁に 1 語の割で現れることになる。Periphrastic -sis の -sis 名詞全体に対する比率は 12% 強である。

以上見て来た所をまとめると、散文作家、特に弁論家では、-sis 名詞を主として概念語として使った例はあっても、これを periphrastic に使うことはむしろ稀である。中では Thuc が非常に目立つ例外で、詩人たちと比べてさえ、periphrastic な -sis 名詞の使用頻度数ははるかに高い。その詩人たちは何頁に1語ぐらいの割で periphrastic -sis を使用していたのかと言うと——と言ってもこれは簡単ではない。第一韻文だし、科白の所とコロスの所では1行の長さにしても大変な違いがある⁴⁾。その他まだいろいろある。従ってこれを OCT-Hdt の頁数に換算するには馬鹿のような計算を重ねなければならない。しかし馬鹿になって敢てやってみると、Aes は OCT-Hdt で 7.9 頁に1語 periphrastic -sis を使い、Soph は 7.1 頁、Eur は 8.7 頁となる。——そこで悲劇詩人も歴史家も弁論家も全部つきまぜて、periphrastic -sis を多用している順に並べてみる。数値は OCT-Hdt で何頁に1語 -sis periphrasis が現れるかを示し、勿論数値の低いほど頻度数は高い。

① Thuc	2.3	② Ant	5.3	③ Soph	7.1	④ Dem	7.8
⑤ Aes	7.9	⑥ Hdt	8.3	⑦ Eur	8.7	⑧ Lys	11.7
⑨ And	13.2	⑩ Aesn	26.7	⑪ Is	28.3	⑫ Xen	34.5.

この表で目につくのは何だろう。① ② と Thuc と Ant が並んで初めに現れていることもその一つ。トゥーキューディデースはアンティポーンからかなり影響を受けたとは多くの書物の教える所である⁵⁾。悲劇詩人は揃って中位の所に並んでいる。弁論家は Ant (それに恐らく Dem) のような例外はあっても概して低い。最後の2人、Aesn と Is に至っては -sis 名詞を periphrastic に使うことなど頭にないと見える。歴史家は——Hdt と Thuc と Xen を「歴史家」として一括することはできない、① と ⑥ と ⑫ ではまとめようがない。

3

しかし、そういう無理を承知の上で、あえてもう一つだけまとめてみよう。上で見たのは periphrastic -sis の頻度数だが、今度は A, B, C, D の種類別である。無理を承知でまとめる第一の理由は、弁論家の periphrastic -sis が余りにも少ないので、その少ないものを個人ごとに種類別に分けてみても仕方がなからう、ただし、弁論家全体をまとめたなら多少共意味のある数値が得られるかも知れない、と期待されるからである。また、今度は実数でなく比率——

例えば弁論家なら弁論家を用いた periphrastic -sis 全体を 100 として、A 1 をどれだけ、B 1 をどれだけ使っているかという比率である。その理由は、悲劇詩人については前号で全作品について調べたのに対し、歴史家と弁論家は本稿の初めにお断りしたように ‘selected passages’ しか見ていないので、実数の表では誤解を招くだけである。さりとて、悲劇詩人の調査対象を OCT-Hdt によって弁論家なみに減らしては、今度は悲劇詩人の periphrastic -sis の数が少なすぎることになる——そこで比率の表にする。なお、「詩人」の実数は前号 114 頁の註 (18) に掲げた数をそのままここで借用する、つまり、ホメーロスと抒情詩人を含んでいる。

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	C	D
詩人	29%	4	2	18	26	11	1	8	1
歴史家	11%	3	3	33	11	2	0	32	5
弁論家	19%	0	5	33	9	5	5	19	5

まずどうでもいいものを捨てよう。A 2, A 3, B 4, D. これらは考慮の外においてよさそうである。

逆に目立つのは A 1, B 1, B 2, C である。捨てもしない、目立ちもしないと残されたのは B 3 だが、これは、前号 108 頁の表を参照して頂けば分るように、詩人の B 3 が 11% にもなり得た唯一の原因はエウリーピデースにある。つまり、εἰς ~-αιν ἔρχομαι というような言い方を、エウリーピデース以外の詩人はしなかった、ということなのである。とすれば、そのこと自体は覚えておくに値しようが、今ここでは考慮の外に置いてよい。

しかしそう言うことを言うのなら A 1 だって同じだということになって、私はこれを残念に思う。詩人で A 1 が他のどの用法よりも多くなり得たのは、これも前号 108 頁の表が示すように、ホメーロスとソポクレースのおかげなのである。だから A 1 に関して言うべきことは、詩人で最も愛用されていた A 1 が散文作家ではそうでなくなった、ということではなく、ホメーロスとソポクレース以外のどの詩人も作家も、彼らほどに A 1 に関心を示しはしなかった、ということなのである。

B の方はどうか。すでに B 3 と B 4 とは考慮の外に出してしまったので、B 1 と B 2 を考える。B 1 は、歴史家であれ弁論家であれ散文作家では詩人の倍も使っている。これは確かに大変な違いである。所が、B 1 であれ B 2 であれ動詞の目的語という点では同じだからと、B 1+B 2 の数を見ると、詩

人、歴史家、弁論家の間に殆ど差がない、つまり B1 がふえた分だけ B2 が減ったのである。B2 というのは -sis が一般動詞の目的語になっている場合だから、それが減ったということは -sis を目的語とする動詞がその分だけ減った、言い換えれば、-sis を目的語とする動詞がある範囲内に固定し限定されて行く傾向が見られる、ということである（圧倒的に多いのは ποιέω である）。

もう一つ目立つのは散文（特に歴史）における C の増大である。実はこれこそ散文の世界で最も目立つと言ってもよい。殆どあらゆる副詞節に対応出来る極めて簡略な言い廻しであって、これがなぜ散文で急にふえたのか、あるいは詩人たちはどうしてこの便利な語法を利用しなかったのか。詩人がこれを知らなかったわけではない。僅かではあるがホメーロスもアイスキュロスも、その他みな使っている。ならばこの用法を余り歓迎しなかったということになり、それはなぜかと問わなければならなくなる。

かくて、periphrastic -sis は弁論家において著しく減って来たという基本的な事実をまず頭に入れておいて、それに付随して見られる現象として、(1) ホメーロスとソポクレースでは A1 が特に目立ったが、その後そういう作家は他に現れなかった。(2) periphrastic -sis は動詞の目的語として使われることが最も多かったのだが、弁論家では -sis 名詞を目的語とする動詞の種類が限定され固定されて行く傾向があった。(3) なぜか分らないが C が散文と共に盛んになった、という3項目が浮かび上って来たことになる。

ここまで来ると「ああ、そう言えば」と思い出す文章があつて、それはハリカルナッソスのディオニュシオスの『トゥーキューディデース論』29の一節である。ディオニュシオスはそこで Thuc III 82.3 を引用している。τῶν τ' ἐπιχειρήσεων ἐπιτεχνήσει καὶ τῶν τιμωριῶν ἀτοπία καὶ τὴν εἰωθυίαν τῶν ὀνομάτων ἀξίωσιν ἐς τὰ ἔργα ἀντήλλαξαν τῇ δικαιοσύνῃ. 僅かこれだけの文章の中に periphrastic -sis が4語（それぞれ D, C, B2, C. ただし ἀξίωσις を B2 と認めることには異論があるかも知れない）とは恐れ入るが、ディオニュシオスに言わせると、このような「名詞で構成された文章というのは聞き苦しい。」そして彼によれば、上の文中の ἐπιτεχνήσεις とか τῶν τιμωριῶν ἀτοπία とか εἰωθυία τῶν ὀνομάτων ἀξίωσις とか εἰς τὰ ἔργα ἀντήλλαγμένη δικαιοσύνη とかいうのはすべて「詩的な periphrasis にこそふさわしい (περιφράσεως ποιητικῆς ἐστὶν οὐκ ἐπιτέτρατα)。」

なるほどと思う。上に引用されたトゥーキューディデースの文章は極端とし

でも(そしてディオニュシオスはわざとこういう極端な文章を選んだに違いない)、弁論家の間には「名詞で構成された文」を避ける傾向があったのではないか。そしてその理由というのが、こういう言い廻しは詩のやることだから、という点にあったのではないか。ディオニュシオスのこの一文は我々にそういうことを思わせるに十分な根拠となる。上で見たように、-sis 名詞を主語とする文章が減ったとか、-sis 名詞を目的語とする動詞が限定されて来たとかいうこともこれで説明がついたと思われる。——とここまで来て、しかしこう簡単に説明がついたのでは面白くない、現に、減ったばかりではない、ふえたものもある、B 1 や C が激増したのはどう説明するのかと、我々は相変らず満足しないことを期待されている。

しかしもう少しだけディオニュシオスについて行く。彼は、トゥーキューディデースが上の何ともややこしい言葉の組合せで伝えたかったのは要するにこういうことなのだと、彼自身なら同じことをどう書くかを示している——*πολλὴν τὴν ἐπίδοσιν ἐλάμβανον εἰς τὸ διανοεῖσθαι τι καινότερον περὶ τὰς τέχνας τῶν ἐγχειρημάτων καὶ περὶ τὰς ὑπερβολὰς τῶν τιμωριῶν τὰ τε εἰωθότα ὀνόματα ἐπὶ τοῖς πράγμασι λέγεσθαι μετατίθεντες ἄλλως ἤξιόν αὐτὰ καλεῖν*。確かにこれなら分り易い。その代り文の長さが殆ど倍近く長くなった。勿論ディオニュシオスは平明ということだけを念頭に置いてこれを書いたのだろう。——しかし私に一番強く感じられるのは、漢字の熟語ばかり並べたような印象のあったトゥーキューディデースの文章が、「動詞的」と言うか、送り仮名の豊富な、と言うか、例えば「その受容」と書いてあったの「それを受け容れたこと」と書き直したような感じの文章になったということである。それにもう一つ面白いのは、トゥーキューディデースの4個の -sis 名詞が全部姿を消し(もつとも一つ新しく *ἐπίδοσις* が加えられた。これは初出はヒポクラテース。散文専用語の一つ)、その代りに不定法が3個使われているということである。勿論これらの不定法は消えた -sis 名詞の代役を勤めているわけではない。しかし -sis 名詞が消えたら不定法が入って来た、というのが面白いと思う。

4

そこで私は、白状すると、各作家の不定法の用い方について刻明に調べたのだが、期待するような意味がある結果は出て来なくて、これは徒労に終わったと認めないわけには行かない⁶⁾。それでも折角調べたのだから何か言っておく気

になれば、(1) 平均して詩人より散文作家の方が多くの不定法を使う。最も少ない Eur は OCT-Hdt の1頁に 5.3 個の不定法を用いているのに対し、最も多い Thuc (ただし演説のみ。叙述の部分ではむしろ、Eur, Aes に次いで少ない方から3番目) と Dem は 11.6 個の不定法を用いている。(2) 不定法を主語とすることが多めの作家は、(多い順に) Dem, Eur (彼は不定法を用いた数は少ないが主語として用いたことは多いわけである)、Thuc (演説のみ)、Is であり、それが甚だ少ないのは(少ない順に) Thuc (叙述部分。ここでは使用された不定法全体の 3.9% しか主語となっていない)、Hdt, Xen, Aesn である。(3) 定冠詞つきの不定法を、散文作家は (Hdt を極端な例外として——彼は 12 頁に1度の割でしか使っていない) 詩人のおよそ 1.5 倍用いている。所がその用い方の少ない詩人と、散文作家では Hdt は、その少ない定冠詞つき不定法の 80% 近くを主格・対格で(つまり名詞節的な役割を果させて)用いているのに対し、Hdt を除く散文作家は約 60% を前置詞の目的語として(つまり副詞節的な意味を担わせて)用いている。この最後の点は、-sis 名詞の用法の中で C が、散文になって俄然目立つようになった、というのと明らかに対応していると私には思える。

以上述べた所で特に注意を惹くのは、(-sis 名詞の用法ではそれほど目立たなかったが) 不定法の用法に関する限り、トゥーキューディデースの叙述部分と演説部分に極端な差があるということと、-sis 名詞の用例が豊富だったトゥーキューディデースと、彼ほどではないがどちらかと言えば弁論家としてはやや多めに -sis 名詞を使っていたデーモステネースが、不定法の用法でも際立っている、ということだろう。

いずれにせよ、不定法もまた -sis 名詞同様散文の時代になってふえたという事実はあるにしても、-sis 名詞の *periphrasis* は散文では激減したのに対し、不定法の場合、それを名詞節の代用として主語に使う用例は、トゥーキューディデースのような壮大な例外を別とすれば、韻文に多く散文に少ないのではなく、その逆でもない。もし差異があるとすれば、それは個人に帰してよい、つまり個人差だと見られる。散文家と共に不定法は亡びはしなかった(どころか、今日でも現代諸語において盛に使われている)が、-sis 名詞を文の代用として使う用法は衰退した。それは、上で見たディオニュシオスのように、詩的な言い廻しだから、と言えすむのかどうか。無論詩的でもあろう。しかしそれならなぜ詩的なのかと問うのは無茶だろうか。ディオニュシオスは「詩的な *periphrasis*」だという言い方をしていた。この場合の *periphrasis* というのは

私が上来使っていたのとは多少意味が違って、まわりくどい言い廻し (circumlocutio) という意味である。

☞ -sis 名詞を多用するのが詩的だと言われる一つの理由は、皮肉なことに、-sis 名詞の圧倒的大多数は散文の時代になってから作られた、ということに関係があると思われる。前号 93 頁の表で示したように、詩人たちが使用した -sis 名詞の語彙は三百何十になる。それに哲学者たちの一部は韻文で書いたので彼らも詩人だということになれば、この数は 400 を越えるだろう。しかしたとえ 400 を越えても、これも同じ所で紹介した Kretschmer の “Rückläufiges Wörterbuch” に掲載されている -sis 名詞総数の十分の一になるかどうか。しかも各詩人が共通して使っている -sis 名詞というものもあるのだから、それを差引けば、十分の一にはとてもならないだろうことは間違いない。言い換えれば、詩人の使った 10 倍以上が散文の作物なのである。そしてそれらの語について Liddell-Scott-Jones の辞書に当てみると、驚くほど多数がヒッポクラテスに帰されている文書に出典があることが分る。それからやはり多いのはプラトーンとソフィストたち、それにヘーロドトスとトゥーキューディデースということになるろうか。

所が彼らが作った夥しい数の -sis 名詞は、概念を表す単語とて使われるだけで、上来見て来たような、他の語と結びついて文と同じ (あるいは動詞と同じ) 働きをするというような性質を持っていない。-sis 名詞というのは動詞から派生する名詞だという意識はあっても、それを有機的に働かせて文の代りを勤めさせるなどということは、その -sis 名詞の中でも、いつからだか分からないほど古くから詩人たちによって伝えられて来た、ごく一部の限られたものについてだけできることだ、ということになるのは当然だろうと思える。

ヘーロドトスとトゥーキューディデースもかなり多くの -sis 名詞を作った。そしてトゥーキューディデースは、その新しい -sis 名詞をも古来の -sis 名詞と同じように使おうとした。これは彼の場合、archaism というよりは、-sis 名詞が本来持っている簡潔な表現を可能ならしめる力を利用したものであろう。ただ彼の場合これを利用しすぎたもので、どうかすると先刻紹介した Thuc III 82.3 のようなことにもなった。あれとディオニュシオスの文を比べてみて、ディオニュシオスの方が分り易い最大の原因は、彼の文では、文を構成している語群 (colon) が一つ一つはっきりして、文をその colon ごとに縦線でも引いて区分することができ、なおその上に、おのおの colon が互にどうかかり合っているかも初学者にも分る、という点にある。トゥーキューデ

イデースでは文の構成要素が入り組んでいて、とても簡単に縦線などは引けない。

だが -sis 名詞の periphrastic な用法が衰えたもう一つの理由というのがあるだろう。それは——-sis 名詞も不定法もそれ自体は単語だが、それを他の語と共に有機的に働かせることによって簡潔な表現を得させてくれるもの、という点は共通である。違うのは、-sis 名詞はその派生源は動詞であっても要するに名詞であるのに、不定法は動詞としての機能は殆ど保存している、ないのは人称と数ぐらいなものだろう、という点である。そこで、他の語との結びつき易さという点では、名詞と動詞という性格の差以上に両者の違いはないものの、他方不定詞には Mood もあり Voice もあり Tense もあり、目的語はもとより、必要とあらば主語も明確に指示し得るのに対して、-sis 名詞ではこういうことはない。早い話が上に見たトゥーキューディデースの periphrastic -sis の No. 4 の ἀναχώρησις は、単語としては「ἀναχωρέω すること」「～したこと」「～するであろうこと」のいずれでもあり得るわけで、当面の文中の ἀναχώρησις がこれらのうちのどれであるのかは読んでみないと分からない、つまり一目瞭然というわけには行かない。こういう不便さは不定法にはない⁷⁾。-sis 名詞と比べれば不定法の方がはるかに、細かい所までの確に表現できるわけである。

Periphrastic -sis のうち C の用法が、前置詞の目的語としての定冠詞付きの不定法と共に、散文の時代に栄えたというのとは、とにかく便利だから、というのが第一の理由であろう。それともう一つ、これが副詞だということも大きな理由に違いない。というのは、つい先刻、トゥーキューディデースの文章はその構成要素が入り組んでいて、文中に縦線を引いてそれを明示するなどということはむずかしい、ということをやったが、この C の -sis 名詞と前置詞+定冠詞+不定法は、文がどんなに入り組んでいる場合でも浮き出て見える。ということは、文の主要な部分に関わり合うことがそれだけ浅いわけで、つまり軽いのである。便利で軽ければ使い易い道理で、だから栄えた。むしろ分らないのは、そんなに使い易いものをどうして詩人たちが使わなかったのか、ということの方で、こういう用法を全然知らなかったのならともかく、わずかながらある。-sis 名詞はホメーロスの『オデュッセイア』、不定法の方はソポクレス以後見られる⁸⁾のに、「見られる」程度に止まったのはなぜか分からない。

こうして、-sis 名詞の起源はかなり古く、詩の中ではこれを生きた言葉として、特に簡潔な表現を得るために十二分に機能したが、散文になってからは、何でも動詞幹に -sis をつければよいという安直さが生かされて巨大な造語力

を發揮した一方で、そうして生れた語はすべて単語にすぎず、他の語と結びつくにしても、限られた動詞の目的語となって慣用句を作る、つまり B 1 として機能する、というのが精一杯のことになった。

一つだけ気になる問題が残る。それは、トゥーキューディデースが夥しい数の -sis 名詞を自分でも作り、また先人から受継ぎもして、その用法も変化に富んでいた、つまり -sis 名詞を十分に活用した、そして彼は不定法も十分に活用した——所が、その不定法の使い方は彼の『歴史』の叙述部分と演説部分では極端な相違を示しているのに、-sis 名詞に関してはそういう違いがないのはなぜか、ということである。しかしこれは半ば以上は不定法の問題だと思われるので、別に考えた方がよいかも知れない。

(註)

1) 『文藝言語研究』(筑波大学文芸・言語学系紀要) 言語篇 4 (1979), 91-114.

2) A. W. Gomme, *A Historical Commentary on Thucydides*, Vol. 1 (Oxford 1945), 440 f.

3) このような計算はその意味に比べて手数がかかりすぎて馬鹿々々しいが、やらないわけにも行かない。OCT-Hdt は 1 頁平均 27 行で、1 行の印刷幅は 85 ミリであるのに対して、Loeb の Ant では 1 行の長さが 75 ミリで 1 頁平均 24 行である。そこで Ant を Loeb から OCT-Hdt に換算すると、Loeb での頁数 $109 \times \frac{75}{85} \times \frac{24}{27} = 85.5$ 、つまりほぼ 86 頁になる。以下 Loeb 版から OCT-Hdt への換算はすべてこの方法による。

4) 因みに、OCT-Hdt の 1 行の長さは 85 ミリ、悲劇の tetrameter は平均 75 ミリ、trimeter は平均 55 ミリ、lyric は平均 40 ミリである。

5) Eduard Norden, *Die antike Kunstprosa*, I (Leipzig 1909; Nachdruck: Stuttgart 1971) 97, Anm. 1; K. J. Dover, *Thucydides, Book VI* (Oxford 1965) xvii などを参照。この言い伝えの最終的な出典は、Norden に引用されているヘルモゲネース(2世紀の弁論家)の『文体論』であるらしい。Cf. Hermogenes, *Περὶ ἰδέων*, 414, 22 ff., 422, 17 ff. この頁づけは L. Spengel (rec.), *Rhetorici Craeci*, Vol. II (Leipzig 1865; Nachdruck: Frankfurt a.M. 1966) による。

6) 表にして結果だけを報告しておこう。悲劇詩人は全部に目を通す余裕がなかったので次のように限定した。Aes は「オレスティア」3 部作、Soph は『エレクトラ』『オイディプース』『コロノスのオイディプース』、Eur は『ヒッポリュトス』『エレクトラ』『パッコスの信女』。なお Thuc は叙述部分 (Nar) と演説 (Sp) を分けた。

1. pp とは OCT-Hdt での頁数、2. Inf とは使われているすべての不定法の数、 $\frac{2}{1}$ は 1 頁に何語の不定法が見出されるか、3. Subj Inf とは主語として用いられた不定法(ただし通常は主語と見なされている *οἱ* や *τοῦ* と共に用いられた不定法を省く)、 $\frac{3}{2}$ はその主語としての不定法の不定法全体に対する比率、4. Art Inf とは定冠詞つき不定

法、 $\frac{1}{4}$ は何頁に1語の割で Art Inf が使われているか、5. N & A とはそのうち主・対格で使われているもの。各項ごとに特に顕著なものを太文字で示す。

	1. pp	2. Inf	$\frac{2}{1}$	3. Subj Inf	$\frac{3}{2}$	4. Art Inf	$\frac{1}{4}$	5. N & A	$\frac{5}{4}$
	頁	語	語	語	%	語	頁	語	%
Aes	83	521	6.3	49	9.4	22	3.7	20	90.9
Soph	109	827	7.6	107	12.9	37	2.9	26	70.2
Eur	100	534	5.3	80	15.0	15	6.7	11	73.3
Hdt	108	881	8.2	38	4.3	9	12.0	7	77.8
Thuc Nar	68	435	6.4	17	3.9	22	3.1	4	18.2
Thuc Sp	33	382	11.6	54	14.1	36	0.9	8	22.2
Xen	65	607	9.3	28	4.6	33	2.0	14	42.4
Ant	86	860	10.0	76	8.8	43	2.0	14	32.6
Lys	82	788	9.6	98	12.4	10	8.2	4	40.0
And	66	643	9.7	70	10.8	17	3.9	9	52.9
Is	85	689	8.1	97	14.1	23	3.7	5	21.7
Aesn	80	649	8.1	41	6.3	18	4.4	7	38.9
Dem	86	769	11.6	116	15.1	130	0.7	57	43.8

7) ここでは不便さと言ったが、これを逆に利用して考えの甘さを胡魔化することもできる。この -sis 名詞と多少似ている点があると思われる漢字の熟語についても同じことが言える。

8) 今回見た悲劇作品に関する限り、不定法のこの用法は、アイスキュロスとソポクレスには見当らなかった。